

古田先生（と権力）の謎

足立信彦

私が古田先生を存じ上げるようになったのは駒場に赴任してきてから数年後、大学院重点化の動きが始まった頃だから1993年のことだろう。まだ日の浅い私にはいったい何が起きているのか皆目見当がつかなかったが、助手（今の助教）以来駒場一筋の古田先生は学内の事情に精通し、ベテランの先生に混じって、いやそれを上回る活躍をされていた。私にとって最初古田先生は雲の上の人であった。そのお人柄に多少とも触れるようになったのは重点化が完了し、先生が専攻の研究科委員（専攻長の補佐役）を務められていた頃だと思う。当時まだ「若手」と呼ばれていた私は、重点化したばかりで制度の整わぬ専攻の雑用請け負いのようなことをしていた。

今でもよく覚えていることがひとつある。或る日、当時8号館にあった専攻事務室で美川さんたちとダベっていると古田先生が飛び込んで来た。なにやらお困りの様子で、訳を聞いてみると、専攻予算をあと一ヶ月ほどのうちに数百万使わなくてはならないという。今では考えられないことだが、大学院重点化当初は使い切れないほどの予算が突然おりてくるという夢のようなことがあったのである。しかしこのショートスパン、金がおりるのはいいがどうやって使おうかと古田先生は頭をかかえていて、私の顔を見るなり「えっえっえっ、ああ、足立先生、まことに恐縮なのですが、このような事情ですので、よろしければこのお金の使い途を考えていただけないでしょうか」とおっしゃった。金の使い途を専攻会議で呑気に議論している暇はないし、大量の本を発注しても期限内に会計処理できるとは思えない。第一、本を置く場所がない。私は専攻のコンピューターをはじめとする機械類の世話をしていたので、こいつならなんとかするだろうとお考えになったのだろう。それから数週間の間、私はあちこちで物品購入の希望を聞き回り、生協や業者のもとに通い、大量のコンピューター（当時は高価であった）と什器を発注してなんとか予算を期限内に消化し切った。現在専攻事務室に鎮座しもっぱら荷物置き場として活躍している不相応に立派な机はその名残である。

このささやかなエピソードにも古田先生の人となりを知るためのふたつのポイントが含まれている。ひとつはいわゆる「古田語」、もうひとつは古田先生の人の用い方である。

私は専攻する分野も地域も異なるので古田先生の学問的業績について何も言うことができない。それはもうひとりの執筆者にお任せすることにして、私はこの二点を中心に

若干の考察をおこない、もって古田先生のお人柄をいささかなりとも描き出してみたい。

古田語なるものの存在を知ったのは専攻会議の席上である。拡充発足したばかりの地域文化研究専攻には新しい組織特有の活気が溢れていた。当時のベテランの先生方には個性的な方が多く、専攻会議では衝突もあったが笑い声も絶えなかった。同じ学部とはいえ所属組織が異なり今まで出会わなかった人々が初めて出会った化学反応のようなものもあったのだろう。そのような会議の中で古田先生の発言はひときわ目立っていた。いや、決して弁舌さわやかとか立て板に水というのではない。滑り出しはつねに、寒い日の古自動車のエンジンのようにガタガタゴトゴトと始まる。それから慎重に徐行運転が開始され、滑りやすい場所やタイヤを取られそうなぬかるみを避け、曲がりくねった小道をそろそろと進む。細心きわまるノロノロ運転に、皆がいったいどこに連れていかれるのかしらんと思っているうちに、あら不思議車はいつのまにか目的地に到着し、紛糾必至だった懸案事項が片付いているという寸法である。われわれは狐につままれたような気持ちで専攻会議を後にし、この古田先生特有の話しぶりを畏敬の念をこめて「古田語」と呼んだ。

それは決して慇懃無礼というのではない。つねに丁寧で、目下の者にも威丈高になることなく懇切に対応してくださるので、相手は煙に巻かれたような気がしながらもなんとなく納得してしまうのである。

古田先生はその後専攻主任を務められたが、卓抜な行政能力を発揮しながらも上から取り仕切るといった感じではなかった。先生がやはり主任を務められた歴史学会の事務担当者K女史の証言によれば「古田先生が困っているのはよく見かけたけれど、いらしているところ、怒っているところは見たことがない」とのことである。我が専攻において裏方として最も近くで接していた美川さんは古田先生に「フルタン」という愛称をつけた。誰が描いたのか、緑色の怪獣フルタンの小さな愛らしいイラストが美川さんのパソコンのデスクトップをしばらく飾っていたはずである。

しかし、今思えば愛らしいとはいえ古田先生を怪獣に例えたのはさすがに身近に接していた人だけがなし得る洞察というものであろう。古田先生はその後、専攻主任、教養学部長・総合文化研究科長、副学長、理事、そして総合図書館長と学内政治における権力の階段を昇っていくことになる。われわれはその度毎に古田先生がそんな立場についたら苦勞なさるだろうと密かに危惧したのだが、実際には立派にその責務を果たされた。特に学部長時代は、駒場寮廃寮という誰がやっても無事ではすまないだろうと思われた難題に取り組みされた。私はその時、騒然とする学生集会で古田先生が大声を出されるのを一度だけ目撃したことがある。それほど緊張とストレスを強いられる出来事だった。それでも古田先生は見事事態を収束させ、今駒場寮の跡地に建つガラス張りの食堂と図書館の前では学生たちがダンスの練習に余念がない。やはり古田先生が一種の怪物だというのは正しい。

さて、その頃のことである。私の耳に古田先生を指して「悪い」奴である、策士である、陰謀家である、というような批評が入ってくるようになった。古田ならぬ古狸である、という語呂合わせのようなことを言う人もあった。しかし私は納得がいかなかった。そもそも悪い権力者と人が言う時意味しているのは、権力欲が強く名声を追い求める、権力を濫用して自己の利益を図る、追従者ばかりを重用する等々であろう。古田先生は権力を愉しんでいるようには見えなかった。私を知る限り先生の唯一の息抜きといえはたまの釣りくらいで、それも重責を担うようになってからはままたなくなっていた。そもそも国立大学学部長の権力からどんな利益が引き出せるというのか。むしろ、駒場寮問題を抱え、曲者揃いの駒場で東奔西走しているというのが真相ではないのか。

そこで私はここで言う「悪い」とはどういう意味なのか考え始めた。まず気づいたのは、この批評が権力の用い方ではなく権力の配分の仕方にかかわるものだけということである。つまり上に述べたふたつめのポイント、人の用い方のことである。学部長・研究科長はさまざまなポストに人を配置しなければならない。人事の要諦はよく言われるように適材適所であろうが、人が望む地位とその能力が一致するとは限らない。というよりも、大学で長がつくものにみずからなりたがる人は多くはない。学部長・研究科長は困難が予想されるポストにも人を配置しなければならないが、官庁や軍隊ならいざしらず大学で命令すれば人が言うことを聞くなどと思ったら大間違いである。駒場寮問題が燃えさかっている最中、誰もが厭がる大変な仕事を勝手気儘な先生方にどうやって頼み込み、引き受けさせたのか。

私の観察によれば古田流人心収攬術の要諦は、相手の欲望を見抜くことにある。目立ちたがりには表向きのポストを、威張りたがりには仕切りの役目を、権威好きには派手な肩書きをというように、相手が自分でも気づいていない欲望を正確に見抜きそれが満たされるポストをお願いする。引き受ければ大変なことになると分かっているのに古田先生に頼まれるとなぜか引き受けてしまう。強制された訳ではないから文句も言えないが、なぜ断らなかったのか自分でも分からない、なんだか騙されたような気がするという感想が「悪い」奴だという批評になって現れたのではないだろうか。能力のある人にふさわしい仕事を与えるだけなら或る意味簡単である。風雲急を告げる事態の中で、とくにこれといったインセンティブがある訳でもない仕事を人に割り振り働いてもらうためには、古田先生が持つ特殊な力が必要だった。人の能力と欲望を按排しながら登用すること、これが古田流人事の極意だと思われる。考えてみれば、かつて私が予算の消化を頼まれたのも、古田先生がお調子者たる私の買い物好きを正確に見抜かれた結果だったのであろう。

それを人が「悪い」力だと感じるのには理由がある。人の欲望を正確に見抜く力とは悪魔の特性だからだ。メフィストフェレスがファウストとの間で魂を売り渡すという契約を交わせたのは、もう一度若返って人生をやり直したいというファウストの欲望を見

抜きその実現に手を貸したからである。神は命令するが、悪魔は欲望に寄り添う。考えてみれば悪魔というのは不思議な存在で、あらゆる人間の欲望が手に取るように分かるくせに自分自身は何の欲望も持っていない。それもそのはずで、彼が欲望を抱き自分の利益を図ろうとすると悪魔の地位から人間に転落して欲望を見抜く能力を失ってしまうからだ。

私は古田先生が一度だけそのような転落を経験したことを知っている。それは先生が当選することになる学部長選挙の前のことである。誰もが次期学部長は最も不運な学部長となること、駒場寮廃止という難題に直面するであろうことを知っていた。そしてこれができるのは古田先生しかいないだろうということも。はっきりと口に出されはしなかったが人々のそのような雰囲気先生は感じ取られたのであろう。初めて、そして私が知る限りその一度だけ、古田先生は自分の利益のために政治力を行使しようとした。当時駒場で尊敬を集めていたロシア文学の泰斗 K 先生を自分の身代わりとして権力の祭壇に差し出すべく策謀を始めたのである。だが、敵もさるもの、K 先生は古田先生の動きを察知し、研究室のパソコンにかじりついて数少ないロシア語教授職の公募を見つけ出し、先方の大学にはなぜそんな大物が移って来たがるのかと不審がられながらも短時日のうちに見事駒場からの脱出を果たした。これはご本人の口から私が直接聞いた事実である。この騒動は、結局古田先生が学部長となり、本来ならばその学部長を強力に支えたであろう人格識見ともに優れた人物を駒場が失うという惨憺たる結果に終わったのだが、それもこれもすべては古田先生が学部長になりたくないというみずからの欲望のあまり K 先生の欲望を見誤ったことに原因があった。とはいえこれは例外中の例外であって、たいていの場合古田先生の読みはあたるのだ。

つまり古田先生は不思議な人物である。人々の欲望を知りそれを操る能力を備えながら、ご自身の欲望自体は見えてこない。ものすごい政治力を備えながら、ただ他人のためにそれを使っているように見える。今夏、私は先生と一緒にベトナムを旅行するというこの上ない幸せな経験をしたのだが、その折りの同行者のひとり、先生と同期のフランス語 K 教授が放った問いはそのあたりの疑問を的確に言い表していると思う。曰く、古田元夫は「権力者か、権力の奴隷か」。古田先生は駒場を去られた後、ベトナムで日越大学を造るという事業に参画されるとのこと。日本とベトナムのパイプ役としてその政治力を今後も遺憾なく発揮されることと思う。

そういうわけで古田流政治術の手法は理解できたと思っているのだが、それらすべてがいったい何のためなのか。その目的、つまり古田先生の欲望はどこにあるのか、それが私にはいまだに分からない。この一文の表題を「古田先生(と権力)の謎」としたゆえんである。

古田先生、ありがとうございます。